

# トップ登場

## 社会に合わせた 次世代水道構築へ



厚生労働省 医薬・生活衛生局  
水道課長  
熊谷 和哉 氏

少子高齢化が進み、将来的な料金収入の減少が見込まれている現在、水道事業は過渡期を迎えている。昨年8月、厚生労働省水道課長に就任された熊谷和哉氏に、自身の経歴を伺うとともに、現在の水道事業に対する考えをお話しいただいた。

### 大学での学びがきっかけに

—これまでのご自身の経歴について、ご紹介ください。

自分で自分を振り返ってみて、これからお話しする経歴であったことが少なからず今の仕事や姿勢に影響しているように思います。

1965年の大阪生まれだそうです。だそうですというのも生後10カ月にして最初の転居を経験しているようで、最初の記憶はこの後の東京からになります。

東京都新宿区落合に6年、落合第一小学校に入学してから小学校4つ、中学1つ、高校2つと転勤族であった父親に連れ回され、全国を流浪することになります。東京、福岡、神戸、山口、京都、大学時代を過ごした北海道、そして就職後の東京。さらに、富山県に2年ほどの地方出向があります。この他、母親の実家であった岩手県前沢町（現・奥州市）は、夏休み・冬休みと通う先で、全て合わせれば2年近く住んでいる計算になろうかと思えます。

このため、「出身は？」と聞かれてもすぐに答えられないのが困ったことのような、ある意味少々の自慢であるような妙な感覚です。このような経歴ですから、当然47都道府県全てに行ってますし、ほとんど仕事ではありますが、英語難民でありながらなぜか26カ国に行く羽目にあっています。「とにかく浅く広く」という今の自分の知識なり能力なりを体現したような経歴であると思えます。

大学では工学部衛生工学科、4年生の講座移行で水道工学講座を選択し、丹保憲仁先生の下に入ったのが現職に恵まれた遠因なのでしょう。

その当時、30年後の自分がこんなところに座ろうとは思いませんでした。バブル経済、バブル採用で公務員人気最低という時期、元来のへそ曲がりの性分が災いして公務員を、そして地元らしい地元もない経歴のおかげで国家公務員を選択することになります。しかし、もし不景気で公務員人気が高い時期に就職活動をしていれば、間違いなく民間企業を選択していたと思います。実際、就職活動として、コンサルタント、エンジニアリング、機器メーカー、広告代理店などへも見学や説明会に行っていたから、そんなに公務員指向でなかったことだけは確かです。

## 熊谷和哉(くまがい・かずや)氏の プロフィール

1965年9月2日生まれ。1991年に北海道大学衛生工学科修士課程修了後、厚生省に入省。厚生労働省、環境省、(独)水資源機構などで、水道、浄化槽、水環境、水資源を担当した。2010年には厚生労働省水道課水道計画指導室長、2016年には(独)水資源機構経営企画部次長、2018年には環境省・大気環境局水環境課長を歴任。2019年8月から現職。

## さまざまな水道行政を経験

——入省されてからは、どのような業務に携わられましたか。

厚生省に入省して以来、厚生省、環境省、国土庁、水資源機構、富山県庁を経験することになります。水道行政の経験は遅く、35歳で補佐になった時が初めてでした。それでもなぜか水関係ばかりの職業経歴で、水道3回、水環境3回、浄化槽2回、水資源機構2回に厚生省国際課で水道ODAに携わりました。水関係以外といえば、産業廃棄物が1回、情報システム・セキュリティが1回、大深度地下利用が1回、富山県庁で環境全般に携わったくらいであり、これほど偏った経歴を持つ人もそう多くはないと思っています。

ここまでくると50代半ばということもあり、残りの現役生活は何かしら水道に関わって生きていけないかとも考えています。また、キャリアの終盤に近づく中で、大学時代の勉強が多少なりとも役立つようなこの場所に来られたことは、本当に幸運なことだと思っています。

現職就任の際に丹保先生からお祝いとお喜びの言葉をいただいた時は、長年お世話になってきたことへのちょっとした恩返しができるような気持ちになったものです。

——特にご自身への影響が大きかったことは何でしょうか。

人口推計との出会い、欧州の水道民営化情報との出会い、東京水道の歴史に始まり日本水道の歴史を勉強する機会を得たこと、この三つが思い浮かびます。

一つめは、平成10年頃の「少子高齢化でありながら人口が増加していた」ことに対する素朴な疑問から始まり、それを理解するための勉強の過程で人口構造と人口推計に出会ったことです。日本という国がどういう国なのか、その一端を捕まえることができたような気がします。その頃はちょうど浄化槽、汚水処理・下水道の業務に携わっていた時期で、下水道等の普及整備が地域に何をもたらすのかを学ぶことができました。

二つめは、欧州、特に英国や仏国から、民営化、BOT、PFIやPPPといった様々な情報、その根幹にある英国行政改革とフランスの民間都市インフラ会社について触れたことです。水道民営化情報を勉強すればするほど、世界の水道の基本が公営にあることを再確認しました。話題と注目の先と主流・本流の有り様がこれほどはっきり分離している、ある意味当然のことでもあるのですが、それを明確に意識させてもらう大きな機会となりました。

三つめは、水道の歴史の長さとそのすごさに触れたことで、現在の水道がよく見えたような気になったものです。江戸水道、東京市水道、東京都水道、そして水不足と水源開発の歴史は、少し大げさですが、水道というより都市開発史とも言えます。人がそこに住むということがどういうことなのか、史実をもって学び、東京水道史を皮切りに各地の水道事業史を勉強しようという気にさせてくれました。また、水資源機構に出向する機会を得て、水資源開発史にも触れられる機会をもったことも幸運だったと思います。

## 執筆通して考えの土台固め

——ご講演や執筆活動などにも積極的に取り組まれています。

この紙面に限らず、得られたものを書いたり話したり、元来の話したがるの性分を發揮してきました。話すのはともかく、書こうと思ったのが運の尽き。雑誌や新聞などは一過性で、講演などとあまり変わらない感覚ですが、これを書籍にする機会を得たのが、いい意味でも悪い意味でも今に影響していると思います。

最初の書籍出版の機会は、全国簡易水道協議会の雑誌「水道」での連載を一冊にまとめるというものでした。非売品の形で会員に無償配布するという企画で、思いがけず様々な方から好評をいただきました。これはまだまだ雑誌への掲載の延長でしたが、極めつけは次に執筆した書籍です。

水道計画指導室長を3年務めた後、同じく雑誌「水道」で連載したものを書籍として販売しようということになりました。文章を書くのは、それほど苦ではないのですが、大変なのはその裏取りでした。参考文献の確認にこれほど苦労するとは思いませんでした。うろ覚えの情報でも講演や一過性の寄稿ならどうにかりますが、書籍として残るものに下手なことは書けません。

また、書籍という形式で読みやすいデザイン、ページ区切りや図表とその配置に本当に苦労しました。編集に熱心な担当者を持たせたことは本当に幸運でした。そうしてできあがったのが『水道事業の現在位置と将来』という本です。

この2冊のおかげで、普通では得られぬ人脈や機会を得ることができました。水道課を離れていた時期に年間10回を超える講演の機会をいただけたのもこのおかげだったと思います。苦労はしましたが、それなりに勉強してきたことや考えをきちんとまとめ、整理し直し、形に残すこと、この作業の中で自分自身の考えていることが何だったのか、その稚拙さや未熟さを思い知りました。少しずつ考えの土台、確固たると言ってはおこがましいですが、基本認識ができたように思います。

## 水道第四世代の創生へ

——現在の水道事業に対する考えをお聞かせください。

今までお話してきたような試行錯誤と経歴から、「今の水道事業はどのような位置にいるのか？」という自問に対する現時点での結論が「水道第四世代の創生」です。

江戸時代の木材や石材による自然流下の伝統水道・和製水道の第一世代、横浜で生まれた近代水道が広がった第二世代、戦後の高度経済成長期以降の水資源開発と水道用水供給事業が生まれた第三世代。そして長期人口減少社会という事業環境変化を機に、もう一度現状水道の再整理と現有水道技術を反映させた次世代水道の構築。この四つめをもって水道第四世代と呼びたいと思います。

現在、日本が持つ水道施設群は土木構造物として、長寿命でなければならないという宿命を負い、これまでの人口増加と都市化に逐次対応してきました。その結果として、現在ある施設の多くは、一世代前の設計技術、資材が用いられています。それを根本的に見直し、現有技術を反映させつつ、今後の社会構造に合わせた次世代水道に変えていく時期にきています。

このような機会には、そうめぐり会えるものではありません。施設の老朽化や施設更新などと、第三世代の発想で見るとはなく、老朽化した現有施設に見切りをつけ、今後の社会構造に合わせた施設容量をどのような施設配置、事業連携の中で持つか。地域全体としての水道施設配置の最適化を考え直す、そのような時代だと思っています。

現在価値の延長で考えれば、人口減少、料金収入減少という状況の中で老朽化と戦う労苦だけを想起してしまいがちですが、今、水道界が見なければならないものは、そのようなことではないはずです。現在ある水道の改良と更新だけでなく、新たに次世代水道を創る、そのための生みの苦しみであると思っています。大変ですがやりがいのある時代の到来、そう考えたいと思います。